〈研究論文〉

エコクリティシズムの潮流１：
生命記号論的エコクリティシズムの展開と文学批評としての課題

芳　賀　浩　一

【要旨】

エコクリティシズムは、自然と文化、人間と非人間の境界を物理的にも認識論的にも橋わたしすることを試みる学際的な文化批評のアプローチであるが、自ら標榜する複雑さゆえに方法論の整理と理論的な洗練を克服すべき課題として負っている。様々な方法が混在する中で、理論的体系が比較的整っている生命記号論的エコクリティシズム（Biosemiotic Ecocriticism）は、エコクリティシズムの将来にとって重要な位置を占めている。本稿はその理論的発展と思想的な成り立ちを明らかにした上で、文学批評としての生命記号論的エコクリティシズムの現状と課題、そして今後の可能性について言及する。

キーワード：エコクリティシズム、生命記号論、文学批評、環境批評。

はじめに

ありとあらゆる「もの」を含む環境を焦点化し、その複雑な関係に新たな批評の地平を見出そうとするエコクリティシズムは、対象を制限する概念的な枠を拒むがゆえに理論化することには常に困難が付きまとう。動物学、新物質主義、ポストモダン、ポストコロニアル、物質志向の存在論、生物地域主義、フェミニズム、社会システム理論、アクターネットワーク理論、現象学など、様々なアプローチが混在するエコクリティシズムに共通する基盤として考えられるのは、近代の人間中心主義が引いた人間と非人間の境界線を見直し、人間を環境の中に位置づけるという理念くらいであろう。そんな中で、生命記号論を用いたエコクリティシズム（Biosemiotic Ecocriticism：生命記号論的エコクリティシズム）は、言語と非言語、人間と非人間、心と自然宇宙を論理的に結びつける批評理論であり、おそらくエコクリティシズムの理論としては（既存の理論の応用を除き）最も体系的なものではないかと考えられる。本稿では、この生命記号論的エコクリティシズムの内容を紹介するとともに、文学理論としていかなる可能性と課題を負っているかを明らかにしたい。

１．シービオクと生命記号論

パース流の記号論を生物学的思想と結び付けて生命記号論へと拡大し、やがてエコクリティシズムへと導く思想の流れを生み出した人物がハンガリー生まれのアメリカ人、シービオク（Thomas A. Sebeok）である。シカゴ大学で学んだ後、プリンストン大学で言語学の博士号を取得したシービオクは、インディアナ大学でウラル・アルタイ言語学部の学部長を務め記号論センターの設立に貢献、学外では記号論学会の中心人物として記号論を世界的に普及する立役者となった。ローマン・ヤコブソンと共同研究を行ったことでも知られているシービオクの専門はいわゆる言語学であったが、彼の思想の根底には非言語の優位性、つまり非言語的コミュニケーションの上に言語によるコミュニケーションが成り立っているという考えがあり、それが彼の研究を言語学から蜂のコミュニケーション研究、動物記号論、そして生命記号論へと発展させることになった。

まずシービオクの功績として挙げられるべきはパースの記号論の解釈と普及であろう。ハーバード大学教授の父を持ち、エキセントリックな性格の持ち主としても知られたパースの文章は読みづらいものが多く、また個々の論が体系的にまとめられていなかったため、彼の思想の評価は後進の研究者による整理と解釈に依るところが大きい。例えばシービオクは晩年の著書である『Sings: An Introduction to Semiotics』（1994 年）を通して、パースの記号論が物（対象）、記号、解釈項（object, sign, interpretant）の 3 者によって成る関係を表し、さらに記号の対象に対する関係の重要な分類として類似、相関、象徴（icon, index, symbol）の 3 つがあることを簡潔に説明している。パースの特徴は記号作用の現象を 2 項ではなく 3 項で考えることである。それは、後にも触れるが、記号の運動が一カ所に留まるものではなく、解釈項はそれ自体が記号となって別の解釈項へとつながる、というように永久に動き続けるものだからである。シービオクは、「解釈項」について次のように述べる。

> パースの 3 つ目の相関物である解釈項についてはどうだろう。彼はこのさんざん議論された（そしてそれ以上にしばしば誤解される）概念について何を意味するのだろう。彼が著作においてひとつの基本的な定義も記していない、というのは正しい。しかし、彼は全ての記号がある解釈項を定め、「その解釈項はそれ自体が記号で（それゆえに）記号の上に記号が重なるのだ」ということを明らかにしている[1]。（12）

シービオクがパースの著作に足りない部分を補いつつ、記号論の理解度を高めるために出来るだけ平易な言葉で説明を試みていることが見て取れるだろう。また彼は、この理論のコンテクストを豊かにするために、言語学以外の思想も積極的に取り入れる。フロイトのフェティシズム論、アインシュタインの量子論、ダーウィンの進化論といった思想が単なる言葉の学問ではないシービオクの記号論の土壌となっている。しかし中でも最も重要なのは、生

物学者ユクスキュル（Jakob von Uexküll）の思想である。ユクスキュルの「環世界」（Umwelt）の概念は、現在の環境思想における（批判も含めて）重要なタームともなっている。日本でも翻訳され話題となったイタリア人哲学者アガンベンの思想に大きな影響を与えたとして、今ではよく知られているユクスキュルであるが、彼の思想を北米に紹介したのがシービオクであったことはあまり知られていない。ユクスキュルの「環世界」とは、ある生物種が、その特異な身体機能を通してある特定の環境を知覚し、それがその生物種の「世界」となっている、という意味である。ユクスキュルの研究は、我々にとっての環境が決して一様ではなく、身体によって限定された世界だということを示したのだ。そしてユクスキュルを援用するシービオクにとってもまた、記号の世界とは決して世界そのものではなく、それぞれの種にとっての環境を描くものである。

記号は、人間という種に特有の現象なのではなく、あらゆる生命に開かれ、利用され、進化している。人間の言語は普遍的（しかし限定的）な記号の上にできた 2 次的な記号であり、それは現実を表象するだけではなく、「無限な可能世界」を形作る非常に独創的なシンボルなのである（127）。シービオクはパースの記号論と生物学的知見に共通点を見いだし、広めることで記号論が生命記号論へと進化する端緒を拓いた。

２．ホフマイアーによる生命記号論の展開

イェスパー・ホフマイアー（Jesper Hoffmeyer）は、シービオクのパース解釈をより緻密に生態学や生物学と結びつけることで生命記号論がエコクリティシズムへと発展するための重要な理論的な橋渡しを行っている。例えば、パースはカント哲学の熱心な読者でカントに影響されたことが知られており、シービオクは、カントの不可知論の枠内でパースの思想を解釈している（Signs 4）。それに対し、ホフマイアーは、パースを近代哲学とは異質な思想家として描き出す。彼は「カントが生態学は自然科学ではない、と考えたのに対し、パースは究極の因果関係は世界における自然の特性である、と考えた」（Biosemiotics 51）と語り、パースとカントの対照性を強調する。また、彼はパースが西洋哲学を支配してきた目的論や運命論とは異なる原理で思考したことも指摘している。アリストテレスが事物の運動の目的を自然のハーモニー、完全、善の形成と考えたのに対し、パースは、無原則と不可逆性が究極の因果関係であり、運命よりも偶然を重要な要素と考えた、と述べる（53）。無秩序と偶然に支配された「もの」の世界が徐々に自己組織と規則を確立し、いわば事後的に自然の法則と見なされるものが作られると考えたのがパースだというのである（62）。そこでは自然科学においては規則と考えられるものも、特定の条件の下で生まれたパターンに過ぎない。そして、ホフマイアーが際立させるパースの環境思想への最も重要な貢献は、外的自然の規則（自然科学）と人間の内的自然（心）を対立するものと考えた近代科学とは異なり、「人の心も宇宙の一般原則の特異な例であり、心の規則があると考えた」ことであろう（63）。ホフマイアー

は、心理学者ウィリアム・ジェイムズの親友であり、彼の経験主義的解釈に大きな影響を与えたパースの思想と現代生物学、生態学、量子学との共通点を明らかにすることで、近代的枠組みを超えた哲学者であったパースに新たな生命を吹き込もうとするのである[2]。

人間の心と外部自然がつながっているということは、内と外、人間と非人間、精神と肉体、といった二項対立的な考え方を否定するものであり、事実ホフマイアーも「街・田舎の二分法」が「傲慢とロマン主義」を生むと語っている（Sings of Meaning 143）[3]。人間の意識や言語を特別視し、それ以外の存在と区別する思考は、人間を世界の中心と考える傲慢さか、あるいは逆に人間社会を卑下し自然世界を楽園のごとく夢想するロマン主義を生むのだ。そこで必要とされるのが、内と外をつなぐ第 3 項である。ホフマイアーは、パースの記号論が単独性（物）としての第 1 項、直接的相関関係（記号）としての第 2 項、そして第 1 項と第 2 項を媒介する解釈項（象徴規則）としての第 3 項を枠組みとして考えたことを応用し、内部自然、外部自然、文化、あるいは身体、意識、世界の 3 項による関係の図式を示す（Signs of Meaning 78, Biosemiotics 66）。そして、2 項ではなく 3 項的記号論を用いる意義は、「境界を固定しない」ことだとする（Signs of Meaning 143）。生命記号論は物、直接的関係、そして解釈項が習慣的なパターンを形成しつつ、常にそのパターンが更新され意味の世界が広がり続けることを示す生きた理論なのである。

外部自然と内部自然のつながりを重視するシービオクやホフマイアーは、世界が身体によって翻訳されて意識化するという関係の図式を考えるが、その際にホフマイアーが言及しているのがジョージ・レイコフの認知言語論である。ホフマイアーにとってレイコフが人間の概念理解のための最も重要な基盤として身体を挙げていることは、生命記号論が主張する生物学的身体と抽象的な言語・文化のつながりを別の角度から証明しているのである。ここで、概念を示す抽象的な記号と身体の具体性の融合、あるいは二重性が重要なテーマとなる。ホフマイアーは、生命体にはデジタルとアナログの 2 つのコードが二重に存在し、2 つのコードが結びつくことによってその特性が発現し、それが再び別の環境へと置き換えられることでその特性は記号的に拡張されると考える。ここで想定されているモデルは細胞の中の遺伝子 DNA と RNA を通してのタンパク質合成の関係である。デジタルなコードとしての DNA は、それ自体ではメッセージを表現することは出来ず、RNA によってアナログな環境に転写され解読されることによって初めて独自の効果（細胞）を生み出すことが出来る。しかし独特な生命としての身体はそのままでは生き残ることが出来ないため、再びデジタルな DNA として次の生命へ記号が伝達される。つまり、象徴的な機能であるデジタルコードだけではなく、アイコンやインデックスのようなアナログな機能もまた記号の働きの一部なのである。そして、このことはホフマイアーの「環境は、どの遺伝子がいつ表現されるかを決める重要な役割を担っている」という言葉に要約されるであろう（Biosemiotics 129）。

またアナログとデジタルの関係でホフマイアーがしばしば参照する思想家がグレゴリー・ベイトソンである。ベイトソンが噛むふりをして遊ぶ小猿たちの様子を観察し、それが「This

is not a bite」（これは噛んでいるのではない）というメタ言語として機能していると考えた事例を採り上げたホフマイアーは、遊びから生まれる抽象的な記号が「存在しない何か」を表現し、そのことによって想像力に縛りがなくなることに注目した（Sings of Meaning 7, Biosemiotics, 87）。必要な目的を遂行することを意図しない「遊び」において、否定の表現（「ではない」）が記号化されるのだ。このことは、ホフマイアーの思想にとって 2 つの点において重要である。まず、連続する時空間の類似性や部分と全体の関係、あるいは直接の反応・因果関係で表されるアナログコードと、記号と記号が表象するものの関係であるデジタルコードの間をつなぐ存在としての「遊び」の意義が明示されていることである。そしてもう 1 点は、動物の遊びに見られる否定の表現が、アナログ形式での抽象表現の限界であり、その可能性はデジタルコードにおいて十全に発揮されることである（Biosemiotics 89）[4]。直接的な関係性に縛られない抽象性によって、想像力が飛躍的に拡大し、在りえないことが表現可能となるのだ。ホフマイアーは記号による表現可能領域の飛躍的な拡大こそが、生物進化の進んできた道だと考える。それゆえに、彼にとって「記号的自由」（semiotic freedom）という概念が決定的に重要な意味を持つことになる。

３．記号的自由（Semiotic Freedom）

> 植物や菌類、原生生物は神経システムを有していないが、彼らは実際自らの行動を導くための受容体を有しており、我々の見方によると、彼らは、たとえそれがどんなに限りあるものにせよ、何からの種類の記号的自由を所持しているのだ。（Biosemiotics 181）

ホフマイアーは、デジタルとアナログの二重コードの結合によって生まれる「個」としての生命の独自性の連鎖が生物進化へつながることと、人間をはじめとする生物が新たなコミュニケーションの形式を生み出すことを一貫した動きとして捉えようとする。つまり、自然と文化は記号的につながっており、生物が環境のニッチを求めて進化を遂げるように、文化的記号もまたそのニッチへと発展するのだ（Biosemiotics 186）。

単細胞生物がやがて多細胞生物となるに従い、その記号的表現のバリエーションが増加し、個や種が交換可能な意味の複雑さも増大するのである。ホフマイアーの「自由」とは端的に言えば自然の掟からの自由である。我々が自然の掟を乗り越え自由を獲得するためには、環境のポテンシャルに合わせて自らを変革するしかない。そのため生物はまず多様な形態への変化を試みる必要があり、その生物の多様性の発露と環境の直接的で物理的な要因の関係によって生物進化が発生すると彼は考える。記号的自由とは、まず進化の条件としての多様性の発露なのである。

人間の言語は、ホフマイアーにとってそのような記号的な多様性の発露の非常に特異な形式として理解される。言うまでもなく、人間の言語の記号的自由度は地球上の歴史において

稀に見る高さである。しかし、言語における記号的自由度の比類なき高さのために、ホフマイアーの思想はディープエコロジー的な環境中心主義とは齟齬をきたすことになる。パースの思想を解釈する過程で近代哲学の 2 項対立的図式や、それを生み出した人間中心主義を批判したにも関わらず、「記号的自由」という物差しで測る進化の度合いは人間が突出して高く、結果として人間の達成を中心に考えてしまうことになるのである。しかし、ホフマイアーはこうした批判には自覚的であり、人間が「他の動物の世界では考えられない記号的自由を獲得した」(309) ことは、ありのままに認めることが必要だと考えている (Biosemiotics 309)。

しかし、だからといって他の生物の重要性が低いということではない。ホフマイアーは蚊を例にとって絶対的な環境中心主義を批判する。人は普段蚊を何のためらいもなく殺してしまうが、たとえ蚊の一匹といえども「唯一のゲノムパターンをもっている」のであるから、環境中心的には蚊ですらも殺してはならないはずである。だが、ほとんどの場合人はそう考えない。それは、人が重視しているのが「ゲノムの特異性ではなく、記号的自由」であるからだ、とホフマイアーは述べる (331)。彼は、他の種への共感が、生物の個別性によって引き起こされるものであり、それは記号的な個別性を我々がどれだけ認識できるかにかかっている、と考えるのだ (332)。自然世界の多様性は、そうした他の種の個別性・記号的自由の表出であり、それゆえに自らの記号的自由にとっても重要なのである。「豊かな記号世界は豊かな環境世界と共にある」というホフマイアーは (332)、自然世界の進化と文化世界の創造を同一の記号的運動の異なる領域における現れと見ることで、生物保護を目的とした環境主義とは異なる環境的思想を展開した。彼は、パースに端を発する 3 元的思考が、まさに偶然を含む「創造」、つまり記号的自由を語る形式であるがゆえに 2 元論よりも有効であると主張する (353)。運命論を否定し森羅万象を記号的自由への運動と見なすホフマイアーは、記号論と生物学の発見を理論的につなげることで人間の文化を自然の一部に位置づけ、生命記号論的エコクリティシズムの展開に向けての基盤を作り上げたのである。

4．ウィーラーの生命記号論的エコクリティシズム

ウェンディー・ウィーラー (Wendy Wheeler) は 2000 年代におけるエコクリティシズムの分野で最も精力的に生命記号論的エコクリティシズムの批評を実践しているといってよいだろう。シービオクやホフマイアー等によるパースの記号論の解釈や生物学や生態学との融合といった蓄積を受け継いだウィーラーは、記号論や生命記号論といった理論に止まらず、それをエコクリティシズムの理論のひとつとして実践的な文学批評も行う。そして生命記号論的エコクリティシズムを唯物論的エコクリティシズムの中に位置づける上で大きな役割を果たしていることも注目される。未だに評価が定まっているとは言えないエコクリティシズムおよびその中でもマイナーな理論とされる生命記号論的エコクリティシズムが今後どのような展開をみせるか、その鍵を握っているのがウィーラーとそれに続くイオヴィーノ (Serenella

Iovino）らの生命記号論者なのである。

ウィーラーの主著である『The Whole Creature』（『全体生物』2006 年）における生命記号論の概念はシービオクやホフマイアーの理論への言及や直接・間接的引用から成り立っている。記号論が言語と非言語を含み、ユクスキュルの概念である種の環境、「種の必要性によって限定された記号的ニッチ」としての「世界」を捉える理論であり、何よりそれがパースの記号論を出発点とすることはシービオクの理論の継承である。更に、ベイトソンによる「遊び」の概念にヒントを得て「生物学的に起こった発展の過程は、新しいレベルで言語・文化にも起こる」とする生命記号論において（Creature 123）、種を複製することを可能にするデジタル（遺伝子）コードと個体の個別的な性質を作るアナログコードの相互関係が文化レベルで見いだされるとする考えは、ホフマイアーを参照しつつ語られる（125）。他にもレイコフの認知言語学や M・ポランニーの「潜在的知識」の概念への関心などが共通点として挙げられる。しかし、ウィーラーを単にシービオクとホフマイアーの延長線上に位置する思想家と捉えるのは、性急に過ぎるであろう。ホフマイアーが記号論と生物学の専門知識の論理を結び付けたとすれば、ウィーラーはロバート・B ラフリンの理論物理学からの知見やジェームス・ギブソンのアフォーダンスの理論など、現代思想におけるパラダイムシフトを重視し、その成果を積極的に取り入れ、記号論の立場からそれらの理論を束ねようと試みている。だが何と言ってもホフマイアーやシービオクとの最大の違いは、ウィーラーを環境思想に導いたきっかけと考えられるレイモンド・ウィリアムズの存在である。

『The Whole Creature』は、生命記号論者としてのウィーラー誕生の軌跡を示す本である。ウィーラーは、実際にはこの本の第 1 章にあたる長いイントロダクション「あるとても長い革命」（A very long revolution）の冒頭にレイモンド・ウィリアムズの『The Long Revolution』（1961 年）からの引用を掲げている[5]。イギリス・マルクス主義を代表する思想家・批評家であるウィリアムズが 1960 年代の民主主義や工業化、そして通信技術の発展を人類の長い革命の過程であると語った引用文には、ウィーラーがエコクリティシズムを志すその根底にある思想が映し出されている。それは 17－18 世紀の近代科学とそれを支えたリベラル個人主義に対するドイツロマン派の思想の意義を見直すというものであり、この点で現代の唯物論的エコクリティシズム論者の一部（例えばモートン）とは考え方が異なっている。

ウィリアムズはイギリスを代表するマルクス主義批評家というだけではなく、現代の環境思想の形成に寄与した思想家としても知られている。ウィリアムズの『The Country and the City』（『田舎と都市』、1973 年）は、資本主義による都市化が同時に田舎を消費の対象として生み出す様を文化の分析を通して示し、エコクリティシズムの先駆的な作品と位置付けられる[6]。ウィーラーの『The Whole Creature』にはウィリアムズの思想と生命記号論を理論的に関係づけることによって自らの思想、批評の基盤とする作業の軌跡が描かれているのである。2010 年代になると彼女の論文からウィリアムズへの言及は消えていくが、思想の出発点としての重要性は変わらないと思われる。

また、ウィーラーがポストモダンやポスト構造主義に対して強く敵対していることも『全体生物』の特徴として指摘されるべきであろう。彼女は、ポストモダンは「ウルトラモダン」であり、それは近代における主観と客観の分離（明らかにマルクス主義の疎外概念の延長である）を極端に進めたものだと考える（21）。ウィーラーは一貫して近代科学の 2 元論に基づく還元主義的思考を批判し、生命、社会、世界の複雑な全体を表す思想として「環境」を志向する。例えばソシュール流の言語学は表示された言語からのみコミュニケーションを考えたが、言語は記号的コミュニケーションの一部に過ぎず、そのような還元的思考に反対して肉体の重要性を訴えたのがドイツロマン主義であったと述べる（17－18）。また別の文脈では「ロマン主義は西洋の行き過ぎた個人主義、疎外、に対する挑戦だったが、その『非科学性』によって美学となってしまった」とも述べている（127）。つまり、ロマン主義は不完全であったが、現代の身体性の議論や全体性への回帰の先駆的思想だったというのである。彼女は同様の論理でフーコーやデリダのポスト構造主義も批判している。それは要するに、言語と現実のつながりが切れた地点から考えられた理論への反対なのだ。「全体生物」（The Whole Creature）という本のタイトルが示すように、ウィーラーの意図は人間と社会、そして環境世界とのつながり、全体性を取り戻す理論を探究することである。彼女にとって現代科学の知見に対応し考え方の変革を訴えるウィリアムズは、近代科学が陥った 2 元論が生みだした対立ではなく、対立からの「人文学的自由を表現」し「人間とは」という問いを立てた思想家であり、前述した生命記号論に通じる考え方をしていたのである（18）。

５．エマージェンス（Emergence，創発）、進化、記号論、そして長い革命

シービオクとホフマイアーが発展させた生命記号論を継承したウィーラーの思想をさらに別の角度から読み解くことで、生命記号論がいかに彼女の政治的理念に結びついているかを示そう。ウィーラーは、『The Whole Creature』において現代の様々な思想を結び付けるが、その際に蝶番の役割を果たすキーワードが「創発」（Emergence）である。一般に「生物進化の過程やシステムの発展過程において、先行する条件からは予測や説明のできない新しい特性が生み出されること」などと説明される「創発」は（広辞苑 1630）、ウィーラーにとってホフマイアーの「記号的自由」につながる概念であり、生命記号論と唯物論、そして複雑系の理論などを融合するために欠かせない言葉なのである。

まずウィーラーは、この本の中の「『還元主義の時代』から『創発の時代』への科学的パラダイムシフト」（12）という文において「創発」という言葉を用い、さらに「この本は、過去 60～70 年の間に起こったパラダイムシフトについて事例を挙げてスケッチしたものです」と述べる（19）。この「還元主義の時代から創発の時代へ」というパラダイムシフトについておそらく最初に言及したのは、物理学者で 1998 年にノーベル賞を受賞したロバート・ラフリン（Robert B. Laughlin）であり、ウィーラーはラフリンの言葉を引用し、現代では科学的原因

の解明が物の部分の動きの分析から全体の動きの分析へとシフトしている、と説明する(25)。近代科学思想史を学んだウィーラーにとって、こうした現代科学の動向は既視感を覚えるものであったに違いない。なぜならレイモンド・ウィリアムズこそ創造性と全体性に歴史的進化の鍵を見出していた思想家であったからだ。彼女は、ウィリアムズが「我々の生きた組織全体の過程」を念頭に「未来を考える」ことを試みた思想家だと語る（25)。彼女が『全体生物』の冒頭にウィリアムズからの引用を掲げたことは既に述べたが、この本の結論部の近くで彼女は再びウィリアムズの思想に言及する。

> ウィリアムズは、『長い革命』を創造性についての議論から始めた。それは社会の複雑さと文化の革命についての彼の初期の理解（印象深く、本質的であったが）の中で、個人の創造的な行為が、どのように（どこからともなく現れる）支配的な感覚の構造の変化としての時代の集団的創造性という奇妙な事実から生まれるかを問題としたからであった。それは潮流の中の波のように、創発し、そして岸に砕け、徐々に引いていくのである。ウィリアムズは、その残余、優勢、創発（residual, dominant, emergent）という概念から成る世界を通して社会と文化が発展すると書いたのだ。(137)

つまり、「創発」（emergence）は科学的パラダイムシフトとウィリアムズの「長い革命」において重なり、両者をつなぐ言葉なのである。さらにウィーラーは、人文学において生物学的現実が無視されている現在の状況を批判し、人類の文化、科学、社会の進化が「空間、物、生命の物理的な関係性の絶え間ない進化の物語」であり、「フェーズ・シフトと創発の現象は、記号論の現象のように、常に状況に依存している、つまり『環境的』な過程なのである」と語る（28－9)。現代の科学において化学と生物学の境目が消えつつあるように、環境においては文化と自然の境がなくなる。「創発」はそのような境目がなくなる時に生まれる「創造」の現れであり、現代における創発のひとつの形は環境という言葉によって表されるのである。

科学思想史家でもあるウィーラーは、量子理論以降の科学思想の成果をつなげる糸として「創発」という言葉を用いて現代思想のパラダイムを描く[7]。特に、バータランフィ（Bertalanffy）の一般システム理論については、彼が心の理論を「脳、身体、そして環境からの創発として」描いたことをウィーラーは強調し（52)、オートポイエイシスの理論では、第一次構造的カップリングにおいて生成された組織と環境の区別が維持されつつ、第二次の構造ではその組織と環境に「創発的関連」が生まれることに注目する（107)。このような先行理論の数々からウィーラーが時代のパラダイムシフトとして抽出するのが、近代における 2 項対立的分離の枠組みから現代の 3 項的理解と 2 項の融合であり、その具体的な例として M・ポランニーの「潜在的知識」の思想等が言及される[8]。

またウィーラーは、ダーウィンの進化論やネオ・ダーウィニズムの思想が遺伝子とその競争という側面ばかりを強調し、スペンサー流の適者生存やドーキンスによって広められた利

己的遺伝子といった考えが支配的になったことを批判する。彼女はこうした進化の理解を「誤った解釈」と語るが（67）、注意すべきは、そうした側面が存在しないわけではないことである。彼女は、細胞における遺伝子と受容体の関係を念頭に「2 つの組織の共生が生命の起源であり、競争と同じように共生も自然では一般的」だと述べる（67）。異なる組織の共生によって生まれる生命は、競争に参加しつつ、また新たなレベルでの共生に向かうのだ。生物としての我々の本質的基盤に、「創造的で進化的な創発の主体」があり（70）、さらに「自意識、言語、文化の進化は人間という動物が表象し記憶してきた創発の形なのだ」とするウィーラーは（124）、我々の細胞、器官、個人、社会、文化といった様々なレベルで相互関係的に創発を生み出し続けると考えるのである。

このようにウィーラー独自の過程を経て発展してきた思想は、「創発」の概念を結い目として「記号的自由」を表現し続ける記号的進化の歴史という観点に立つホフマイアーの生命記号論と合流することになる。彼女は、ホフマイアーが「創発という基盤」の上に立って「進化の物語」を「『自然が習慣をもつ傾向』、そして自由と束縛の相互作用を通してのさらに大きなレベルでの複雑性と記号的自由」へと向かうと考えている（125）、と述べる。ホフマイアー自身が明確にそう述べることはないが、彼の生命記号論がウィリアムズ流の史的唯物論と親和性があることをウィーラーは示唆し、ホフマイアー自身もそれを否定しないのである[9]。こうした点から考えると、ウィーラーの思想的な貢献は、記号論を基盤とした現代思想の上で、一度は別々の方向に発展した西欧マルクス主義と進化論、ネオ・ダーウィニズムを再解釈し融合したことにあるのかもしれない。近年「唯物論的エコクリティシズム」が注目されるようになっているが、その中で生命記号論的エコクリティシズムが一定の地位を占めることになったのはウィーラーの理論的仕事に依るところが大きいと考えられる。一般に「プラグマティズム」として認知されているパースの記号論と唯物論との隔たりは大きいと思われるが、唯物論的エコクリティシズムにおいては、環境を重視する立場から「もの」の作用主体性（agency）を認め、人間や動植物だけではなく無生物にもある種の意味創出の主体性があると考えることによって「もの」の定義が大きく拡張され、同時に細胞レベルでの生命体の生成・維持・進化が化学物質の認識、つまり記号の伝達によって成ることから「記号」が持つ意味も拡張された。その結果、「もの」と「記号」の接触領域が形成されることになり、唯物論的エコクリティシズムはその領域を積極的に定義し意味づける作業を行っているのである。生命記号論を用いる論者は少数派であるが、2 項対立（競争）から 3 項的循環（共生）への移行やリアリズムと観念主義、還元主義と全体主義の融合といった、地球全体の枠組みで考える「環境」にとって重要な思考の変革の理論的な貢献という点において、この理論の重要性は変わらないと考えられる。

６．文学批評としての生命記号論的エコクリティシズム

生命記号論を基盤とするエコクリティシズムの発展をシービオク、ホフマイアー、ウィーラーと辿ってきたが、この系譜は、生命記号論の中でもとりわけ文学文化批評へと向かう流れである。特にウィーラーの批評が文学文化批評としての生命記号論的エコクリティシズムを牽引してきたといってよい。自らを再生する存在としての生命が単細胞生物から多様な多細胞生物へと進化する過程を記号としての類似・相関関係から規範と自由（創発）の生成という運動による複雑性の拡大と捉える生命記号論において、なぜ文学批評が重要なのか、という問いに答えることは容易ではない。そこには身体と精神・文化・社会の関連を重視するポスト近代の時代的な思想基盤が必要であり、その上で自然界における進化と人間の文化における創造を結び付ける思想が求められる。ウィーラーは、ホフマイアーの記号的自由の概念とウィリアムズの創発の概念を融合させることによってこの要求に応え文化批評の道を拓いたのである。彼女によって文学は、人間の遊びである文化（記号的コミュニケーション）の領域において記号的自由を追求する最も典型的な試み、として再評価されることになる。

また近年、生命記号論を評価し同時に文学の重要性を指摘した論文にフバート・ザフ（Hubert Zapf）の「Creative Matter and Creative Mind」がある。エコクリティシズムの最前線に立つ批評家らによる論文集『唯物論的エコクリティシズム』（2014 年）の中でウィーラーの「Natural Play, Natural Metaphor, Natural Stories」の直前に載せられた同論文においてザフは、文学が「自然と文化による創造の形の相互関連性と差異」を明らかにするものであり（51）、生命記号論は「自然の記号的な創発と人間の創造性の結びつき」を論理化すると述べ（53）、両者の組み合わせの意義を指摘する。ザフは、「文学は、自然と文化をつなげる役割」を果たすと結論づけ（66）、近代における人間中心的で 2 項対立的思考による人間と自然の分離が生んだ閉ざされた表現としての近代文学（感情やエロス、非人間的自然への特化）を批判する。こうした議論はウィーラーの一連の批評を整理・洗練したものといえるが、そこで問題となるのが生命記号論的エコクリティシズムによる文学批評の実践であろう。

やや時間は遡るが、ウィーラーは、『Ecocritical Theory New European Approaches』（2011 年）と題された論文集に収められた「The Biosemiotic Turn: Abduction, or, the Nature of Creative Reason in Nature and Culture」（「生命記号論的転回：アブダクション、あるいは自然と文化における創造的原因の本性」）において生命記号論的エコクリティシズムの立場から文学批評を試みている。人間がいかに意味を生成するかという疑問への情熱が芸術を作る動機と考えるウィーラーにとって、言語の芸術である文学は「自己理解のために我々が最も期待する」形式であるという（276）。DNA コードをたんぱく質が読み取る際のメタフォリックな解釈と、直観としてのアブダクション（仮説的推論）を重ねあわせ、「心」が身体化された記号論的な環境で生成されることを指摘したウィーラーは、バイアット（A.S.Byatt）の『天使と虫たち』（Angels and Insects, 1993 年）においてダーウィン主義（デジタルコード）と詩的な媒介性（ア

ナログコード）の対立の物語が展開されていると解釈し、現実とは詩的な解釈に支えられているのだと主張する（277）。そして同論文の最後の節で彼女は、イアン・マクイワン（Ian McEwan）の『黒い犬』（Black Dogs, 1988 年）を取りあげる。

小説の登場人物バーナードの科学的な考え方とジューンの精神的な考え方の対比を強調するウィーラーは、ジェーンの考え方の優位性を指摘し、この作品が言語的な記号によって非言語的な記号世界を描き、人間の身体化された直観や黒い犬やサソリという生命記号が、それ自身もまた多くの意味に満ちた生きた記号であるかもしれない、と語る（279）。機械的な世界に対して心は無目的で主観的と考えるバーナードと心には本来目的があるはずだとして直観の力を信じるジューンの対立は、それぞれが近代における対照的な 2 項対立的世界観だというのがウィーラーの解釈である。そして、小説の語り手である「私」の見方に仮託する形でウィーラーは生命記号論的世界観を語ろうとする。つまり、異なる世界観を受け入れないがために関係が断絶してしまう近代的思考の 2 人（特にバーナードの近代科学的思考）ではなく、異なるものを受け入れる愛の重要性を認識する第 3 項たる「私」に開かれた未来を強調するのである。結論として彼女は次のように述べる。

> 我々が、異なるストーリーに自らを閉ざす時、関係は壊れる。バーナードとジューンのストーリーは、橋渡しのできない近代のストーリーであり、そこではデカルト的分離によって知識そのものが切断されている。記号と意味の創造がすべての生命の属性であると知ることによって、生命記号論の転換は、おそらく長く分離されてきたものを再統一するという、より大きな動きの一部となるだろう。（280）

文学表現における近代の 2 項対立的世界観であるリアリズムと観念主義を体現したかのようにも見えるバーナードとジェーンの間の齟齬をつなぐのは、「もの」と「心」を同じ記号作用の異なる現れと考える記号論であり、創発的な運動なのである。その記号の作用が生命の根源的な働きであると考える時、それは生命記号論となる。ただし、マクイワンが文学的に「愛」と表現する、異なる考えの受容行為をそのまま生命記号論的な創発、記号的自由と解釈してよいものかという点で疑問は残る。また、ウィーラーは黒犬やサソリといった生命記号の存在に言及しておきながら、それらの生きた記号がどのような関係世界を作り、またどのようにその関係が変化するのかについては詳述していない。記号の関係性の仮説的推論による進化こそが創発であり記号的自由の表現であるはずなのである。もしバーナードとジェーンの間で関係性の変化が起こらなかったとすれば、それは語り手「私」を通して生命記号論の批評家に見出されるべきなのではないだろうか。

ウィーラーは、この論文において生命記号論そのものよりもパラダイムシフトのスキームを優先したために、愛による他者の融合という、特に生命記号論である必要のない結論で締めくくることになった。しかし、彼女が「生命記号論」とは「より大きな動きの一部」であ

ると語っていることには留意すべきである。局所的な分析の科学から、それらの部分をつなげて全体を見る科学へのパラダイムシフトが行われている、というのが彼女の時代分析であり、「環境」はそうした時代の科学として地球全体を俯瞰しなければ理解できない。生命記号論は生物の個体とその文化・社会の再生と発展を共通の記号的運動体として理解しようとするが、それもまた大きなパラダイムシフト、「環境」の時代の一翼を担う思想なのである。

ウィーラーの論文における文学批評が生命記号論の直接的な応用としては緻密さに欠けるところがある一方で、大きなパラダイムシフトに接続することに成功していることは、生命記号論のエコクリティシズム、あるいはエコクリティシズム一般についての強みと弱みを同時に示していると言えるだろう。ウィーラーの論文は、パースの概念で帰納でも演繹でもない仮説推論である「アブダクション」を自然と文化をつなぐ「創造的な理由」とする。生命記号論的エコクリティシズムが近代的な帰納や演繹の論法を自然と文化の全体を関係づけるのに十分でないと考える以上、そこに我々が評価基準として長年受け入れてきた近代科学的厳密さを求めることはできない。生命記号論的エコクリティシズムによる文学作品の分析・批評においては、創造でありフィクションであることが、いかに現実として理解されている関係性の領域を記号論的に拡張するか、ということが問われるのである。このような分析・批評を評価するか否かは、ポスト近代のパラダイムを受け入れるか否かにかかっている。文学世界におけるパラダイム転換を実現するために、生命記号論者たちは今後継続して現実世界を効果的に見直す分析と解釈の枠組みを発信し続けていく必要があるだろう。

＊本研究は JSPS 科研費（26580067）助成の成果の一部です。

【参考文献】

Bateson, Gregory. *Steps to an Ecology of Mind*. Ballantine Books, New York, 1972.

Cheryll, Glotfelty and Harold Fromm ed. *The Ecocriticism Reader.* University of Georgia Press, 1996.

Clark, Timothy. *The Cambridge Introduction to* ***Literature and the Environment.*** Cambridge UP, 2011.

Hoffmeyer, Jesper. *Biosemiotics*. University of Scranton Press, 2008.

―*Signs of Meaning in the Universe*. Barbara J. Haveland trans, Indiana UP, 1996.

Sebeok, Thomas A. *Sings: An Introduction to Semiotics*. Toronto UP, 1994.

Wheeler, Wendy. *The Whole Creature*. Lawrence & Wishart, 2006.

―"Natural Play, Natural Metaphor, Natural Stories." Serenella Iovino
and Serpil Oppermann ed., *Material Ecocriticism*, Indiana UP, 2014. 67-79.

―"The Biosemiotic Turn; Abduction, or, the Nature of Creative Reasonin Nature and Culture." *Ecocritical Theory New European Approaches*. Goodbody Axel and Rigby, Kate ed., Virginia UP, 2011. 270－282.

Williams, Raymond. *The Long Revolution*. Parthian Books, 2012.

Zapf, Hubert. “Creative Matter and Creative Mind: Cultural Ecology and Literary Creativity.” Serenella Iovino and Serpil Oppermann ed., *Material Ecocriticism*, Indiana UP, 2014.51-66.

新村出編『広辞苑』第六版、岩波書店、2008 年。

[1] 引用文の日本語訳は全て筆者による。

[2] パースとジェイムズの違い、あるいは「プラグマティズム」をめぐる誤解については様々な研究がある。しかし、本稿にとって重要なのは、環境によって思考概念が規定されるというパラダイムである。

[3] この点におけるホフマイアーとウィーラーの違いについては後に触れる。

[4] ここで忘れてならないのは、icon や index といったアナログコードが symbolic なデジタルコードにも含まれていることであり、symbolic なコードが規範から自由になる時にはアナログコードが再び活用されることになる。

[5] 引用の全文は以下の通り。In naming the great process of change the long revolution, I am trying to learn to assent to it, and adequate assent of mind and spirit. I find increasingly that the values and meanings I need are all in this process of change. If it is pointed out, in traditional terms, that democracy, industry, and extended communications are all means rather than ends, I reply that this, precisely, is their revolutionary character, and that to realise and accept this requires new ways of thinking and feeling, new conceptions of relationships, which we must try to explore. This book is a record of such an attempt.『The Long Revolution』13-14 頁,『The Whole Creature』12 頁.

[6] 『The Ecocriticism Reader』55-56 頁.『The Cambridge Introduction to Literature and the Environment』4-5 頁. など。 特に欧州のエコクリティシズムにはウィリアムズの影響が大きい。

[7] バータランフィ（Bertalanffy）の一般システム理論、プリゴギン（Prigogine）の流形ダイナミックス、ウィーナー（Wiener）のサイバネティックス、ホワイトヘッドの有機的メカニズム、そしてカノン（Cannon）のホメオスタシス、さらにはマラチュラとヴァレラのオートポイエイシスなどが言及される。

[8] 本稿ではあまり触れることが出来ないが、マイケル・ポランニーはウィーラーがその思想的根拠としてしばしば言及する理論家である。彼の「潜在的知識」という概念は、人間は意識をせずに（言語化できない）知識をもっており、それこそが創造的発想の源泉である、というもので、近代的な意識・無意識の分裂をつなぐ役割としての「創造」と意識化していない知識の役割を強調する。

[9] 『全体生物』(『The Whole Creature』) に寄せたホフマイアーの推薦文が何よりもそのことを示している。

The Current in Ecocriticism 1:
Development of bio-semiotic ecocriticism and its prospects as a form of literary criticism

Koichi Haga

Abstract

Ecocriticism is a new, interdisciplinary approach to cultural criticism that aims to encompass a complex web of relationships between physical and conceptual entities and connect both cultural and social, digital and analogue, and human and nonhuman agencies. While ecocriticism draws attention in the area of humanities as an emerging practice, the critics recognize that ecocriticism still needs to refine its method and distinguish itself from other practices. Among various approaches co-existing in the field of ecocriticism, I find that biosemiotic ecocriticism is a relatively systematic and consistent theory; thus, it occupies a critically vital place for the future of ecocriticism. In this article, I render the development of biosemiotic-ecocriticism and its philosophical implications explicit and refer to its potential as a form of literary criticism.